

保育観察と表現ワークショップを組み合わせた保育実践力向上研修プログラムの開発  
—音を伝えるための ICT 活用—

佐川早季子・東村知子・古賀松香・平井恭子・高野史朗・岡田裕平

# 保育観察と表現ワークショップを組み合わせた 保育実践力向上研修プログラムの開発

—音を伝えるためのICT活用—

佐川早季子<sup>1</sup>・東村知子<sup>1</sup>・古賀松香<sup>1</sup>・平井恭子<sup>1</sup>・高野史朗<sup>2</sup>・岡田裕平<sup>3</sup>

(1: 京都教育大学・2: 京都教育大学附属幼稚園・3: 京都教育大学附属学校事務課)

## Professional Development Program Combining Observations and Expression Workshops to Enhance Early Childhood Education and Care Practice —Devising the Use of ICT to Convey Sound—

Sakiko SAGAWA, Tomoko HIGASHIMURA, Matsuka KOGA, Kyoko HIRAI, Shiro TAKANO,  
Yuhei OKADA

2025年9月29日受理

**抄録**：音楽表現分野の保育実践力向上研修プログラムの開発を目的に、ICTを活用して、外部講師と子どもたちの保育観察と保育者向けの表現ワークショップを組み合わせたプログラムを提案した。2024年7月に行った研修の活動内容の分析と参加者の振り返り記述の検討を行ったところ、保育観察と表現ワークショップの参加者の学びには共通点と相違点があった。共通点として「音・音楽表現の捉えの広がり」「正解・制限のない表現のおもしろさへの気づき」「音・音楽表現を楽しむための保育者の役割への気づき」が挙げられる。一方、保育観察にのみ見られたのは「子どもが音を感じる過程への気づき」等、表現ワークショップにのみ見られたのは「体験することでの音楽表現の楽しさの感受」等のカテゴリであった。保育観察と表現ワークショップを一貫したねらいで行うとともに、それぞれの活動形態が相補的に参加者の学びに寄与するデザインが必要と考えられる。

**キーワード**：保育者向け研修プログラム、ワークショップ、音感受、音楽表現、vitality affect

## I. 研修プログラム開発の目的

### 1. 京都教育大学幼児教育協働研修の概要

京都教育大学幼児教育科では、京都府下の多様な保育施設の保育者間の協働的な学び合いによる保育の質的向上を目的として、主に初任期及び中堅期の現職保育者研修を行っている。保育施設は現在、幼稚園、保育所、幼保連携型認定こども園の3種に分かれ、国公立により所管部局や研修体系が異なり、知の分断がある。また、働く女性の増加に伴い、保育所及び子育て支援のニーズが高まる一方、幼稚園への入園希望は減少している。このような状況の中で、研修が保障され、専門性豊かな教員が多い国公立幼稚園は、地域の研修センターとしての地位を確立することが喫緊の課題となっている。そこで、本学幼児教育科と附属幼稚園は、地域の研修センターとしての役割や各職能団体のハブ的な役割を積極的に担うべく、2016年より幼児教育協働研修を開き、京都府下の公立幼稚園・保育所・認定こども園等に対して、公開保育の焦点観察と協議を中心とした研修を提供し、好評を得てきた。同年には、京都市幼稚園教育研究会が共催団体となり、協働的な研修体制を構築した。2017年には、京都市共同機構研修として、附属幼稚園に加え、京都市立幼稚園においても同じ形態で公開保育研修を開催し、さらに京都府幼稚園・こども園教育研究会が共催団体として加わった。2018年には、京都市営保育所とも協働的な関係を構築し、附属幼稚園、京都市立幼稚園、京都市営保育所において保育者のキャリアステージにふさわしい研修の提案を行うことで、それぞれの研修センターとしての意義を深めつつ、保育者の早期離職を食い

止め、キャリアの継続とキャリアアップ支援を行うことを目指して活動してきた。さらには外部の専門家を招聘し、専門家と子どもが遊ぶ時間の観察と保育者参加型ワークショップ型の研修を組み合わせ、保育実践力向上研修を開始し、自然遊びワークショップ研修、身体表現ワークショップ研修を実施した。2019年には本学音楽科教員との合同研究プロジェクトとして多様な楽器を用いたワークショップ型研修を実施し、年間を通して保育内容にも活かしていく取り組みを行ったが（樫下ら、2020）、2020年以降は、新型コロナウイルス感染症への対応策として、公開保育研修・ワークショップ型研修を取りやめ、オンラインシステムを活用した研修を行っていた。その後、2023年に新型コロナウイルス感染症が「5類感染症」に引き下げられたことから、2024年から、再び公開保育研修とともに、ワークショップ型研修を再開することとした。それが、保育観察と表現ワークショップを組み合わせた保育実践力向上研修である。本稿では、2024年7月に吉永早苗氏（東京家政学院大学教授）を迎えて京都教育大学附属幼稚園で行った研修『音』から広がる子どもの世界』の活動内容を分析し、参加者の振り返り記述を検討することを通して、初任期及び中堅期の現職保育者の保育実践力向上に資する「表現」領域の研修プログラムを開発することを目的とする。

## 2. 保育における領域「表現」の研修の課題

保育者の専門性の養成・向上の今日的課題を論じた奥山・山名（2006）は、保育者の専門性における問題の一つに、実技中心の傾向、特に具体的な技能の獲得を重視する傾向があると述べている。昭和期の幼稚園の保育内容は、現行の幼稚園教育要領とは異なり、教科的な「保育項目」や「望ましい経験や活動」など具体的な活動が配列されていた。特に唱歌は重要な位置づけがなされていたため、実技研修としてスキルの獲得が特に重視されていた。唱歌については「幼稚園の象徴的な保育内容として評価され、それに関する保育技能のみが幼児教育に特有の専門性として位置づいていった」（p.120）と考えられている。この保育者の専門性の養成・向上における実技志向や技能的側面の重視について、同じく奥山・山名（2006）は、「それは単なるスキルとしてではなく、それが必要とされる状況の理解、幼児の内面を読み取る力や、感性とともにあってはじめて、保育における意味を立ち上がらせる」と述べる（p.128）。樫下（2020）もまた、「『正しい奏法』や『正しい運指』を最初に、というのが教育界では定石となっているが、そのことが子どもの主体的な表現を引き出すことの障害になっている可能性を考慮すべき」と述べ、「子どもの側からその楽器の奏法や音色の探求が自発的に生まれてくるよう環境を整えることが必要」（p.188）であると述べる。単にスキルを子どもたちの前で使ったり身につけさせたりするのではなく、子どもの興味・関心や心情を読み取る力や子どもの側から自発的に音の探究がなされるような環境を整えること、そこに保育者自身の感性が伴うことで、保育行為として意味をもつというのである。

とりわけ、領域「表現」においては、表現するための実技・技能のみでなく、感性を働かせることが重要だと考えられている。本研修において講師を務めた吉永は、著書『子どもの音感受の世界：心の耳を育む音感受教育による保育内容「表現」の探究』において、音楽表現の生成過程について次のように述べている（図1）。「表現とは、感じたことや考えたことを表出する営みである。（中略）感じる営みは、『気づいたり感情を抱いたり』することを指し、考える営みは『想像したりイメージしたり』することを指す。音楽表現はその性質上、演奏発表という形態で練習の成果が伝えられるものであるため、アウトプットをよくする方法論にのみ、注意が向けられがちである。しかし、インプット（『感じる・考える』）のない表現活動（アウトプット）はあり得ない。『感じる』営みは、その時点までに経験されてきたあらゆる種類の感性的インプットによって育まれる。さらには『考える』営みを介し、人は連想的に組み合わせようとする。音楽表現の具体的なイメージは、そうした連想（『考える』ということ）から生まれ出てくる。音楽における創造とは、このような内的過程のことを意味している」（吉永、2016、p.25）。表現の内的過程を考えると、研修においても、実技・技能などのアウトプットの方法論のみを伝達するのではなく、インプットにあたる「感じる」「考える」営みにもあわせて焦点を当てる必要がある。

さらに、吉永（2016）は、幼児期の「音感受」<sup>注1）</sup>の力を育むための観点の一つとして、保育者の感受性をあげ、「保育者の感受が外界の多様な刺激に対して豊かに開かれていること、音感受の状態を示す子どもたちの言



図1 音楽表現の生成の循環  
（吉永、2016、p.25）

動に気づき、共感する感性をもつということが、保育者に対する音感受教育の立場からの願いである」(p.34)と述べる。このように、保育者自身の感性・感受性が開かれること、保育者が感性・感受性を働かせることも、領域「表現」を扱う研修のデザインには必要な視点であるだろう。

### 3. 保育における「情動の力動感 (vitality affect)」

本稿では、保育者および子どもの感性的位相をとらえる視点として、「情動の力動感 (vitality affect)」に注目する。笠原(2017)は、子どもとのワークショップの体験を捉え、表現し、考察や分析を行うための手がかりの一つとして、スターン(1985/1989)の vitality affect の概念を検討している。「スターンは乳幼児が関係する他者や事象を知覚し、刻一刻と変わる対象や状況の変化の中に普遍的な自己や対象の統一感を見出すことができるのは、言語や認識としては名づけられない無様式な知覚体験を、ある『感じ』として知覚体験するからだとし、その無様式な『感じ』である力動感を vitality affect と名付けた。乳児は様々な情動を力動感=vitality affect として感じており、これは単に乳幼児期にのみ成し得る前認知的な知覚体験であるだけでなく、人間が生きていの中で止むことなく絶えず感受され続けている基層的な知覚領域だという」(p.65)。人との出会いによって起こってくる情動として直接体験されるものを vitality affect と呼んでいるのである。また、このときの「情動」については、怒り、悲しみ、幸せなど、感情といってもよいようなカテゴリー性情動と、明確な概念では示し得ない広義の情動があるとする。そうした情動に共通する「ほとぼしり」という力動感に当たるものが vitality affect であり、カテゴリー性情動であれ広義の情動であれ、共通する「感じ」としての力動感が vitality affect なのであるという (p.66)。vitality affect は「人間相互のかかわり合いの中にある、体験を生きる情動の動的な現れを捉え、形を与える概念であり、感性的コミュニケーションを媒介・生成する鍵となる」(p.73)。本稿では、この vitality affect を「情動の力動感」と訳し、保育観察と表現ワークショップを通じて、参加者が感受した体験の質感をとらえることを試みる。

## II. 研修のデザイン

### 1. 保育観察と表現ワークショップを組み合わせた研修のデザイン

上述した課題を踏まえ、保育実践力向上研修を以下のようにデザインした。

「保育実践力向上研修のデザイン」

子どもと専門家による実践の観察と表現ワークショップを通して、研修参加者が幼児期の音感受や音楽表現について実践を構想できるようにする。

《具体的な手順》

- (1) 幼児期の表現活動を専門とする講師を招聘し、附属幼稚園の保育時間に5歳児対象の保育実践を提案する
- (2) 研修参加者は、保育(実践提案)の観察を行う
- (3) 附属幼稚園の遊戯室で、研修参加者の保育者を対象とする講義及び表現ワークショップを行う
- (4) 講師によるグループ発表の講評及び解説を行う
- (5) 幼児教科教員による最新の幼児教育の動向と本研修の意義に関する解説を行う

研修をデザインするにあたり、以下の2点に留意した。

一つ目は、実技や技能的側面だけをスキルとして取り上げて伝達するのではなく、そのスキルを子どもたちとともに使う状況や、そのときの子どもの興味・関心や心情の読み取りも含めた場をつくることである。そこで、幼児期の音感受・音楽表現を専門とする講師を招聘し、附属幼稚園の保育時間に5歳児対象の保育実践を提案することとした。参加者が保育観察を行うことで、音楽表現に関わるスキルだけでなく、子どもたちが音を感受し音で遊ぶにふさわしい環境構成や援助、そのときの子どもの興味・関心や心情の表出、それに講師がどのように応じるかまでを含めて感じ取ることができるようにするためである。その後、講師による講義及び表現ワークショップを行うという順序にした。

二つ目は、表現の内的過程を踏まえ、実技・技能などのアウトプットの方法論のみを取り出すのではなく、イン

プットにあたる保育者自身の「感じる」「考える」営みにもあわせて注意を向けることである。そこで、保育観察後には、講師による講義及び表現ワークショップを行い、保育者自身が身近な音を感じる体験や、グループに分かれて身近なものを使って音楽をつくる体験を行う。具体的なスケジュールは、表1の通りである。

表1 保育実践力向上研修のスケジュール

12:30 受付 開始	13:00 5歳児と講師の交流・ 保育実践提案 ※ (参加者は観察)	14:00 5歳児降園 昼休憩	14:30 講演 ワークショップ	16:30 まとめ	16:50 終了 アンケート
-------------------	---	-----------------------	------------------------	--------------	----------------------

## 2. 音を伝えるためのICT活用

本研修への参加者は90名を超えることが見込まれたため、5歳児と講師の保育実践提案の観察は、会場（附属幼稚園遊戯室）で直接観察を行う参加者と、会場からの中継映像を別室で観察する参加者とに分かれて行うこととした。そこで浮上したのが、中継映像で音を伝えるという難題である。本研修では、会場が国立大学附属幼稚園であることの利点を活かし、附属学校園のICT担当者と附属幼稚園教職員の協力を得て、中継映像で音を伝えるという課題に取り組んだ。

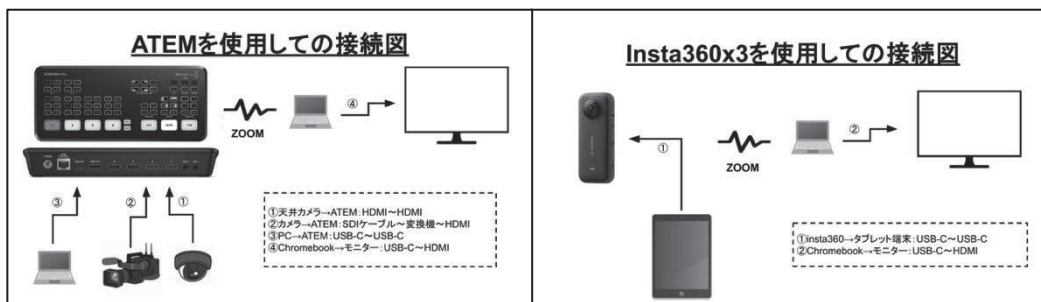


図1 機器を使用する際の接続図



図2 アクションカメラを使用した  
接近映像の撮影風景



図3 当日の中継映像  
(左モニター：接近映像 右モニター：俯瞰映像)

中継映像は、Zoomを使用し、俯瞰映像と接近映像の2種類の映像を別々のモニターに映し出した(図2)。俯瞰映像は、遊戯室に設置されたモニタリング用の天井カメラをビデオスイッチャー(ATEM<sup>注2)</sup>)に接続し、さらにそれをパソコンに接続し、Zoomの映像として流した。接近映像は、小型のアクションカメラ(Insta360x3)をタブレット端末(Windows)に接続し、そのタブレット端末の映像をZoomで流した。小型のアクションカメラは、附属幼稚園教員1名が手に持ち、外部講師を中心に撮影し、講師と5歳児とのかかわりや5歳児の発言、身近なもの(紙など)で鳴らした音も拾うようにした。これらの音には、オンライン会議等の場合は環境雑音としてノイズ抑制の対象となるような性質のものも含まれるため、Zoomのオーディオ設定においてバックグラウンドノイズ抑制を「低」とした。また、アクションカメラの音声設定は、カメラが映している方向の音声を中心に捉えるよう「方向性強調」(指向性を高める)とした。

### Ⅲ. 参加者の学び

本節では、講師である吉永早苗氏と5歳児との保育場面及び保育者向けワークショップ場面の事例考察と参加者の振り返り記述より、活動内容を分析し、参加者にどのような学びがあったのかを検討する。

#### 1. 講師による5歳児との保育場面の活動内容分析

表2は、講師である吉永早苗氏による5歳児との保育実践の進行表である。実際には、活動中に、子どもたちの様子を見ながら変更した部分がある。

表2 吉永早苗氏による5歳児との保育実践の進行表

時間	活動	準備物等
13:00	あいさつ 「名前をどうぞ」 わらべうた「おてぶしてぶし」 「かれっこやいて」	
13:10	動きから音へ「なべなべそこぬけ」 1 二人組→4人組→8人組→16人組 2 クールダウン「消えゆく音をキャッチ」 3 「なべなべそこぬけ」の音探し	トーンチャイム 「ソ」「ラ」「シ」 「ミ」「レ」「ド」
13:25	雨の音...ぽつぽつ、ざーざー	絵本『どしゃぶり』
13:35	雨の降りはじめ～どしゃぶりまでの場面を音で表現しよう (事例1)	グループ活動 楽器 廃材等
13:55	発表・鑑賞 意見交換	
14:00	片付け	

わらべうたから始まり、次に「なべなべそこぬけ」を人数を増やししながら、全員で行なったことで、子どもたちの気持ちはほぐれている様子だった。トーンチャイムを使って、次第に消えていく音を聞きながら、音が聞こえる間は手を挙げておく「消えゆく音をキャッチ」の活動をした後には、トーンチャイムを使って「なべなべそこぬけ」に出てくる音を探した。次に、絵本「どしゃぶり」の読み聞かせを行い、子どもたちはグループに分かれ、雨の降りはじめからどしゃぶりになるまでの場面を音で表現する活動を行った。そこでは楽器や紙、空き箱などの廃材等を子どもたちが自分で選び、どんな音で雨を表現するかを思い思いに試し、音をつくっていた。その後、雨の降りはじめからどしゃぶりまでの場面を、全グループで表現し、聴き合った。

表3 保育観察についての振り返り記述のカテゴリー分類

カテゴリー名	記述例	記述数 (比率:%)
子どもが音を感じる過程への気づき	・雨の様子を表現する時に、「ポツポツ」「ザーザー」という言葉だけにとらわれずに、自分の中ではイメージを持っているがなかなか言葉で表現しにくい音も表現しようと様々なやり方を試している姿が印象的だった(中略)自分で音を鳴らすだけではなく、音をじっくり聴いて味わう時間も大切なのだと感じた	19 (34.5%)
音・音楽表現の捉えの広がり	・素材を使って音を表現することを保育として取り入れる機会が少なかったの で、実際に保育実践を観察して子どもたちが楽しむ姿が印象的だった ・音に気付いたり、音を自分でつくったり、音の表現方法の豊かさに気付くことができた	14 (25.5%)
音・音楽表現を楽しむための保育者の役割への気づき	・子どもが素材、教材、道具、体験などどのように出会うかを保育者がいかに 考え、環境構成をしていくかが大切だと気付くことができた ・子どもの表現する姿とそれを捉える先生の感覚の素晴らしさを感じた ・子ども達が興味を持つような言葉掛けや、イメージしやすい(経験してきた) 雨というテーマと音作りの面白さを学ぶことができた	11 (20.0%)
子どもが音を身体全体・身体の諸感覚で捉えることへの気づき	・子どもは、全ての感覚を使って音をたのしんでいるとわかった ・子どもたちが様々な素材に出会う中で、全身でいろいろな試しをしており、 の中で身体で音を感じている姿を知った	7 (12.7%)
正解・制限のない表現のおもしろさへの気づき	・どうしても、正しいリズムを正確な音程をとリズム打ちする、歌う前にうまく いかなかったらどうしよう意識をしてしまい、音楽の表現活動を敬遠しがちで あったが、公開の活動をみて、子どもたちの表現に委ねてよいのだと思った	4 (7.3%)
有効回答数の合計		55 (100.0%)

本節では、参加者による振り返り記述から、保育観察を通じて参加者にどのような学びがあったかを探るため、アンケートに有効回答のあった振り返り記述をカテゴリーに分けた(表3)。さらに、その記述に関連があると考えられる保育場面の事例を抜粋し、活動内容の分析を行うこととする。

研修参加者の振り返り記述でもっとも多く見られたのは、「子どもが音を感じる過程への気づき」である。次の事例1は、身近な素材を使って、雨の音をつくるという活動の一部である。

#### 事例1 「音のお話をつくって」

(吉永氏が絵本『どしゃぶり』を読んだ後、子どもたちにグループごとに集まるように伝える)

吉永氏：じゃあ、お友達と今日は相談しながら、雨がね、ポツポツ、トントん、トントん、トントんって降ってきた時から、雨が、ザザザザザザザーって降ってきて、わーって降ってきて、で、最後に雨さんがなくなって、はい、音がなくなりましたっていうお話を、音のお話を作って。(中略)ここにいろんなものがあります。何を使ってもいいです。

(子どもたちが様々な素材や道具の中から、音を出すモノを選ぶために取りに行く)

A児：(紙を手にとって、両手でくしゃくしゃにして音を出す) ザーッ

吉永氏：ねえ(と言ってA児と顔を見合わせて、にっこりと笑う)

B児：(紙を手で振り、ガサガサと音を鳴らす)

吉永氏：ほら、どんな音がするかな

C児：どれにする？

D児：どれにしようかな

E児：え、丸めてもいい？

吉永氏：何してもいいよ

F児：丸めない

E児：丸めてもいい？

吉永氏：うん、いいよ

(子どもたちが様々な素材や道具などを取り、そのモノを使って、様々な音を出す)

- ・カラーセロファン紙を取って腕を振り、子ども同士で顔を見合わせて、カサカサッという音を同期させて笑い合う
- ・卵のパックを片手でたたき、バラバラと音を鳴らす
- ・空き箱をマレットで叩いて、バンバンと音を出す
- ・両手にパラフィン紙を持ち、リズムに乗って踊りながら振り回す
- ・光沢するフィルム紙を両手で丸めながら、ガサガサと音を出す
- ・カサカサと音の出る紙を、5歳児担任保育者の耳元に持っていき、手で振って聞かせる
- ・空き箱同士を叩き合わせて、音が出るかを試す



事例1のように、子どもたちは雨の様子を表現する時に、「ポツポツ」「ザーザー」という言葉だけにとらわれずに自分のイメージを表現しようとしていた。逆に、手に取った素材から出る音に触発されて、自分なりの音をつくって雨の音を表現する姿も見られた。振り返り記述では、子どもたちが試す様子、音に耳を澄ます様子に、「子どもが音を感じる過程への気づき」を得ている参加者ももっとも多かった。

次に振り返り記述で回答数が多かったのは、「音・音楽表現の捉えの広がり」というカテゴリーである。研修参加者の振り返り記述では、「紙や空き箱などの素材を使って音を表現するという活動を行ったことはなかったが、実際に子どもたちが楽しむ様子を見て、身近なモノで出る音を再発見し、子どもが素朴な形で音を表現する方法が多様にあることに気づいた」と述べる記述が多かった。

三つ目のカテゴリーは、「音・音楽表現を楽しむための保育者の役割への気づき」である。事例1でみられる

ように、講師は、子どもが音を感じているときに、その音のおもしろさを一緒に感じるように「ねえ」と応じたり、子どもが素材や道具とどのように出会うかを考え、環境構成をしたりしていた。このように、子どもたちが音に興味をもち、耳を澄ませてみようと思えるような言葉、雨というテーマでの活動デザインも含め、保育者の役割に気づきを得たという記述があった。

四つ目のカテゴリーは、「子どもが音を身体全体・身体の諸感覚で捉えることへの気づき」である。事例1では、カラーセロファン紙をもって腕を振り、子ども同士で顔を見合わせて、セロファン紙から出る音を同期させて笑い合う子どもたちや、両手にパラフィン紙を持ち、リズムに乗って踊りながら振り回す子どもが見られ、聴覚だけでなく身体の諸感覚で音をとらえ、自分の身体を音の共振器として使うことで音とふれ合う感覚を子どもの動きから感じ取ったという記述があった。これは、その場で保育を見て「情動の力動感」を感じたからこそ得られた気づきだといえる。

五つ目のカテゴリーは、「正解・制限のない表現のおもしろさへの気づき」である。正しいリズムや音程を再現させるような音楽活動しか知らず、正解があるのが音楽活動という先入観を持っていた参加者も、子どもたちが身近な素材を使って音を自由に表現することを楽しむ「情動の力動感」が伝わってきたことで、表現の仕方には「正解がない」と思えたのではない。

## 2. 保育者向けワークショップ場面の活動内容分析

保育者向け表現ワークショップでは、一つのテーマを、音が出る紙（パラフィン紙、新聞紙、ダンボールなど）を使ってグループで表現した。その際、大きめの画用紙（模造紙の半分）とクレヨンでグループに1セット用意し、自分たちのイメージから音を鳴らし、それを図形にして模造紙に表すよう講師から指示があった。この図形楽譜と発表を披露して、他のグループの人に、どんなテーマで表現したのかを当ててもらおうゲームを行った。

本節では、この保育者向け表現ワークショップを通じて参加者にどのような学びがあったかを探るため、振り返り記述をカテゴリーに分けた（表4）。その記述に該当すると考えられるワークショップ場面の事例を抜粋し、活動内容の分析を行う。

表4 保育者向け表現ワークショップについての振り返り記述のカテゴリー分類

カテゴリー名	記述例	記述数 (比率:%)
体験することでの音楽表現の楽しさの感受	・音って楽しいんだ、イメージを広げたり表現したりすることって楽しいんだ、と純粋に感じた。音楽＝楽器となりがちで、楽器の技術がない私は苦手意識をもっていった。しかし、ワークショップではワクワクしながら音を楽しむことができた	22 (37.9%)
音・音楽表現の捉えの広がり	音は身の回りに溢れているのに今まであまり意識していなかったことに気付かされた。同じものでも音の出し方によっていろいろな音が出たり、人によって感じ方が全然違ったり、音で表すものは同じでも様々な表し方があったりなど、言葉ではうまく表現できないことも音だったら表し方がすごく広がると感じた	21 (36.2%)
保育者の感性・感受性の大切さへの気づき	・楽譜をよむのではなく、感性を大切にしながら表現する経験が、今までなかった ・普段は見過ぎてしまっていた音に耳を傾け、気持ちを注ぎ、表現することで自分の感性につながるものを感じた。他者の感性にも触れられた有意義な時間だった	6 (10.3%)
正解・制限のない表現のおもしろさへの気づき	・相手のアイデアや感性を否定せずに受け入れながら遊ぶおもしろさを感じた。表現に制限や決まりはなく、自分の世界を広げることにつながると感じた ・表現は苦手意識が強かったが、正解がなく、いろいろな方法で楽しむ事ができることを知った	5 (8.6%)
音感受、音を聞くことの大切さへの気づき	・音をよく聞く経験を意識する大切さを感じた ・耳を澄ますという行為と思考を働かすという行為との関係が興味深かった	2 (3.5%)
音・音楽表現を楽しむための保育者の役割への気づき	・濁らない音、ペンタトニックのお話をしていただいた。なべなべそこぬけで5度の音を使って保育をされていた時に、私も不快な音がしないなと思い、綺麗な音色と共に心地よさを感じた。嫌な音だと思えない環境を用意するというお話をお伺いし、音に敏感な子どもも多いので、そのような環境なら音に触れて遊ぶことが楽しめるだろうなと思った	2 (3.5%)
	有効回答数の合計	58 (100.0%)

## 事例2 「これだって楽譜になりますよ」

吉永氏：これだって楽譜になりますよ、ってことなんです。たとえば、この出発点を「アー」とすると、みなさんどうぞ。ここから順に上がりますよ。

参加者たち：「アー」「アーアー」（声の音程を上げたり下げたり）（笑い声）

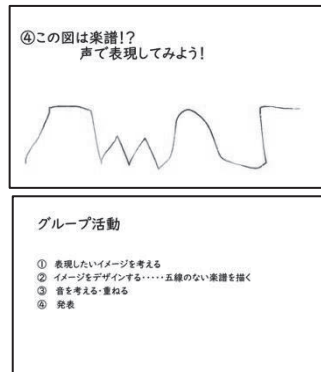
吉永氏：これを学生さんとやったときに、「先生、音楽っておもしろいね」って言うんですよ。私は音楽が苦手だったし、楽譜も読めないし、演奏もできないけど、こういうことだったらできるから、保育のなかでやってみたいって。その自信、なんか自分でできそうだなってという自信ってすごく大事だなって思うんですよ。でも、こうやって子どもたちと楽しく遊んでいる中で、実は、声、声域が広がってくるんですよ、保育者自身の。先ほどのエレベーターゲームも、先生が読み聞かせはできるんだけど、でも、面と向かってピアノもなして歌うのは苦手だっていう先生は多くいらっしゃると思います。でも、歌が苦手って人は、正しく歌おうとするから難しいんだと思うんです。こういうゲームをやりながら、高い・低いということをやっていく。そうやっていきながら、自分も歌にそれを生かしていけるといいなっています。確かに、養成校では、正しい音程で歌うってこともします。でも、それで、苦手意識をもってもらっては困るわけなんです。「音楽って楽しい」ってところからはじめて、「表現したい」、「子どもの前で表現したい」っていう先生にならっていたきたいなっています。

（中略）

吉永氏：今日、先生方に経験していただくのは、こうした図形楽譜、時間軸で表せるものでもいいですし、何かのイメージ図を描いてもいいです。そうしたデザインを楽譜として、まず、描いてください。それを描きながら、ここにどんな音ができるかなってことを考えてください。そこに持ってきていただいた身の回りの紙であるとか、今日こちらに用意していただいているモノを色々使い、組み合わせながら、作品を作ってください。はい。一つ何かしらグループでテーマを作ってください。花火にしようとか、祇園祭にしようとか、なんでもいいです。テーマを持っていただいて、それを図形に表す、そして、それを披露して、みなさんにテーマを当てていただく、というようなゲームをしてみようと思います。

（参加者たちが10人程度のグループに分かれて、輪になって座る）

- ・話しながら、テーマを決める
- ・自分の持ってきた紙を両手でくしゃくしゃにして音を出す
- ・新聞紙の切れ端をたくさん持ち、一気にばら撒く
- ・クレヨンで、模造紙（半分に切ったもの）に図形楽譜を描く



事例2では、講師が「図形楽譜」を紹介し、音楽活動に苦手意識を抱いていた学生も、「こういうことだったら、保育のなかでやってみたい」と自信をもてるようになったことについて述べている。ワークショップでは、初対面の人もいる中、すべてのグループが図形楽譜を描き、身近なモノを使った音楽表現活動をした。振り返り記述には、音楽表現に苦手意識をもっていたが「体験することで音楽表現の楽しさの感受」ができたことを何よりも研修の成果だったと書いたものも多かった。その中には、自分の手で試行錯誤して音をつくり出すことの楽しさ、五感を使って音を感じる楽しさ、つくる楽しさ、相手とつながる楽しさ、他者と協働する楽しさなど、多様な楽しさについての記述があった。これは、参加者相互の情動的な触れ合いの中で感じられる「情動の力動感」がもたらした楽しさであり、具体的な相互行為と同時に存在している体験の質感であるものだと考えられる。

次に記述数が多かったのは、「音・音楽表現の捉えの広がり」の категорияである。実際に体験することを通して、「音は身の回りに溢れているのに今まであまり意識していなかったことに気付かされた。同じものでも音の出し方によっていろいろな音が出たり、人によって感じ方が全然違ったり、音で表すものは同じでも様々な表し方があったりなど、言葉ではうまく表現できないことも音だったら表し方がすごく広がると感じた」というように、身の回りにある音の存在や、多様な表し方に気づいたりしたという記述が多くあった。

上記二つのカテゴリーで、全記述数の74%を占めたが、三つ目のカテゴリーは、「保育者の感性・感受性の大切さへの気づき」、四つ目のカテゴリーは「正解・制限のない表現のおもしろさへの気づき」である。事例2で、講師は、楽譜を読めるかどうか、演奏ができるかどうか、正しく歌えるかどうかではなく、保育者自身が感性を

働かせ、音楽を楽しみ、表現したいと思えるかどうかが大切だと述べている。このような講師の言葉と、ワークショップを通じて感性を働かせながら表現する機会を得たことが、このような気づきをもたらしたのだと考える。

## IV.本研修プログラムの意義と課題

### 1. 保育力実践向上に資する「表現」領域の研修プログラムとは

本稿は、領域「表現」、特に音楽表現分野の保育実践力向上研修プログラムの開発を目的に、外部講師と子どもたちの保育観察と保育者向けの表現ワークショップを組み合わせたプログラムを分析した。「Ⅲ.参加者の学び」では、参加者の振り返り記述をカテゴリー分けし、本研修プログラムでの参加者の学びを整理した。本節では、「表3 参加者の保育観察についての振り返り記述のカテゴリー分類」と「表4 保育者向けワークショップについての振り返り記述のカテゴリー分類」を比較し、その共通点と相違点から、保育観察と表現ワークショップは、どのような点で一貫しており、どのような点で補い合っているのかを検討したい。

まず、両方の振り返り記述に見られた共通のカテゴリーとして、「音・音楽表現の捉えの広がり」「正解・制限のない表現のおもしろさへの気づき」「音・音楽表現を楽しむための保育者の役割への気づき」が挙げられる。これは、講師による保育実践で参加者が感じたものと、講演やワークショップで講師が伝えたメッセージが一貫していたためと考えられる。本研修を通じて、身近なモノを介した音や、音楽の芽生えともいえるような「前音楽的表現」も音・音楽表現であることを知り、正しいリズムや音程を再現させるような音楽活動とは異なる、正解や制限のない音楽表現のおもしろさに気づき、それを支える保育者の役割について改めて考えた参加者が多かったのではないかと考えられる。

一方、保育観察の振り返り記述にのみ見られたカテゴリーは、「子どもが音を感じる過程への気づき」「子どもが音を身体全体・身体の諸感覚で捉えることへの気づき」であった。これらのカテゴリーは、実際に、目の前でモノに触れ、音に触れ、音を感じる子どもたちの姿を見なければ感じられないものである。講演を聞き、保育者自身がワークショップを体験したとしても、子どもが音を感じる過程や子どもが身体全体を使って身体の諸感覚で音を捉えることには、気づけないであろう。自分とは異なる他者である子どもたちが音・音楽をどのように楽しんでいるかを「情動の力動感」を感じながら観察したからこそ感じられたものであったといえよう。

次に、保育者向け表現ワークショップの振り返り記述にのみ見られたカテゴリーは、「体験することでの音楽表現の楽しさの感受」「保育者の感性・感受性の大切さへの気づき」「音感受、音を聞くことの大げさへの気づき」であった。これらはどれも、自分自身が体験することではじめて意識し自覚できることである。これはスキル習得にとって体験が重要ということではない。ワークショップの振り返り記述の中には、「最初は少し恥ずかしいようにも思いましたが、だんだん楽しくなりました」というものがあった。また、体験の楽しさの中に、自分の手で試行錯誤して音をつくり出すことの楽しさ、五感を使って音を感じる楽しさ、つくる楽しさ、相手とつながる楽しさ、他者と協働する楽しさなど、多様な楽しさについての記述があったように、観察者としてではなく参加者として状況に巻き込まれ、他者との間に生じる「情動の力動感」を感じたからこそ、自らの感性的位相の動きに気づくのではないだろうか。

以上のように、本研修は、保育観察と表現ワークショップを組み合わせることで、参加者である初任期及び中堅期の保育者にとって、一貫して、身近なモノを介した音による「前音楽的表現」も音・音楽表現であることを知り、それを支える保育者の役割について改めて考えるものであったこと、また、保育観察により子どもたちが音・音楽をどのように楽しんでいるかを「情動の力動感」を感じながら観察したこと、表現ワークショップにより他者との間に生じる「情動の力動感」を感じて自らの感性的位相の動きに敏感になったことで、異なるタイプの研修から相補的な学びを得られることに意義があると考えられる。さらに、ICTを活用して、音楽表現を行う保育観察を参加者全員に実施できることも、本研修プログラムの意義の一つであると考えられる。

### 2. 本研修プログラムの課題

本研修プログラムの課題は2点挙げられる。一つ目の課題は、「Ⅲ.参加者の学び」で見られたような参加者の

学びは、研修講師の力量によるところが大きいという点である。本稿で検討した研修では、保育実践提案と保育者向けの表現ワークショップの活動デザインは、すべて外部講師である吉永早苗氏に一任した。吉永氏は、事前に幼稚園の下見をし、音楽表現における専門的見地から附属幼稚園の環境で何ができるかを吟味した上で保育実践提案と表現ワークショップを行った。今後は、外部講師の個人の力量に頼るのではなく、保育実践力向上に資する研修を行うための仕組みをさらに検討していく必要がある。二つ目の課題は、音を伝えるための ICT 活用の効果を検証できなかった点である。講師と5歳児との保育観察は、参加者の半分を遊戯室での直接観察、もう半分を他の保育室での中継映像による観察とに分けて行った。しかし、事後の振り返り記述では、どちらの観察形態で保育観察を行ったかを問わなかったため、直接観察と中継映像による観察にどのような違いがあったか、ICT活用がどこまで効果的であったのかを検証できなかった。たとえ、音を伝えることはできたとしても、その場に共にいることで感じられる「情動の力動感」は、映像では観察できなかったかもしれない。その点の検証を行うことが今後の課題である。

## 注

- 注1) 音感受とは、子どもが、身の回りの音や人の声・音楽からその印象を感じ、共鳴し、感情が起こり、さまざまな連想を引き起こす行為を吉永（2016）が名付けたものである。
- 注2) ATEM（Blackmagic Design ATEM mini Pro）とは、映像配信用の機材（ビデオスイッチャー）であり、ATEM をパソコンに接続すると、WEB カメラとして認識され、入力した複数の映像・音声をミックスしたり、切り替えたりするなどの操作を本体のスイッチで行うことができる。Zoom などのオンライン配信にも利用することができる。

## 引用文献

- 笠原広一（2017）子どものワークショップと体験理解—感性的な視点からの実践研究のアプローチ—. 九州大学出版会
- 樫下達也・平井恭子・樫山ゆかり・高野史朗・中東静香・古賀松香（2020）子どもと楽器の出会いのプロセス—幼稚園の音楽活動と小学校器楽教育の接続に着目して—. 京都教育大学紀要 137, 173-189.
- 奥山順子・山名裕子（2006）求められる保育者の専門性と大学における保育者養成—保育者志望学生の意識と養成教育の役割—. 秋田大学教育文化学部総合教育実践センター教育実践研究紀要 28, 119-132.
- Stern, D. N.（1985）The Interpersonal World of the Infant: A View from Psychoanalysis and Developmental Psychology. New York: Basic Books.（小此木啓吾・丸田俊彦監訳、神庭靖子、神庭重信訳（1989）乳児の対人世界. 岩崎学術出版社）
- 吉永早苗（著）・無藤隆（監修）（2016）子どもの音感受の世界：心の耳を育む音感受教育による保育内容「表現」の探究. 萌文書林

## 謝辞

本研修を企画・運営するにあたり、外部講師として来ていただき、活動内容の提案を引き受けてくださった吉永早苗先生に心から感謝いたします。また、身体全体で音を楽しむ姿を見せてくれた附属幼稚園の子どもたち、研修運営や準備に尽力くださった当時の附属幼稚園教員田邊菜々子先生、谷山南先生、梶並瑠璃香先生、濱田理恵先生、山崎琴乃先生、大石夏生先生、北山千嘉子先生、京都教育大学職員の林芳正さんにも、多大なるご協力をいただきました。ありがとうございました。

## 付記

本研究は、令和6年度京都教育大学教育研究改革・改善プロジェクト経費の助成を受けて行ったものである。